

表具工 寛正伸

平安時代より日本家屋に珍重された「書」「絵画」の保存・鑑賞のため、和紙、裂地、糊などを使い、掛軸、屏風、襖、障子などを仕立てる仕事。特殊な技術を要する分野で、現代の壁紙専門のクロス工とは一線を画す。この伝統的な技を現代建築の中に融合、活用させ、新しい工法に挑んだ職人がいる。

表具家業の四代目に生まれる

表具工・寛正伸は、一九六一年生まれ。祖父の代から伯父、父と三代続いた表具職人の家に育ち、子供のころから仕事場に入っていた。「あの時分は自営業の家が多かったですし、中学卒業後、特に使命感があったわけでもなく、自然に家業を継いだという感じです」

表具は「表装」とも呼ばれ、和紙を襖・障子・掛軸・屏風・衝立・障壁画などに仕立てる工芸的仕事だ。平安から鎌倉にいたる仏教が盛んな時代に主に経巻の表装として始まり、絵巻物にも描かれた、千年に近い歴史ある職業。

「襖や障子貼りは建具類で、掛軸や屏風は室

内を飾る調度品のような感じで、あまり関係なさそうですが、和紙と糊を使い、刷毛を使って仕上げるという基本的なところは共通なんです」

「物から学ぶ」を痛感

かつて寛が手がけた文化財の修復で、忘れられない仕事がある。

「六年くらい前に文京区にあります旧安田楠雄邸という東京都指定文化財の修復をやらせていただいた時に、蒔絵師の松田権六氏の言葉を思い出したんです。先輩や兄弟子の『人に学ぶ』とともに『物に学ぶ』というのがあります。昔の方がどうやって作ったのか、その実物を検証するのが勉強になるということです」

古く傷んだものを見れば、すぐに新しく直してきれいにしたくなるのが人情。だがそれでは、建物は保存できても技術が受け継がれない。

「ただ直すんじゃなく、元の技法でやらなければいけない。あのような立派な建物は見えないうちにも手をかけている。それが全体の雰囲気、質感にも出てくるのか、と感じました。お目にかかることが不可能な何世代も前の職人

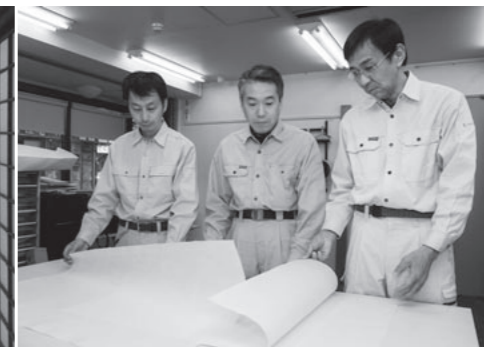


KEEP

守り、伝えること

「文化財の修復で

『物から学ぶ』大切さを知った」



左/旧安田楠雄邸は、1919(大正8)年に建設された近代和風建築の一つ。1998(平成10)年に東京都指定の文化財となり、翌年から大規模な修復工事が行われた。(提供:(公財)日本ナショナルトラスト)
中/今回の工事では、若い世代(左から尾島・島田・寛各一級技能士)が段取りや下ごしらえを経験した。「和紙の難しさ、不安定さっていうのは使っていないと理解できないんで」(榎池袋松屋のラボにて撮影)
右/和紙に糊を塗る刷毛、和紙を貼る時に撫でつける刷毛などさまざまな種類を使い分ける。

※蒔絵師…漆器の表面に金粉・銀粉などを定着させる装飾法。
松田権六は「漆聖」とも称された蒔絵の人間国宝。



現場のプロフェッショナル KEEP & CHANGE

さんから仕事を教わったような気がしました」
「具体的に、どんな厚みの和紙を使ったか、糊シロが何だったとか、すべて記録し、再現しました」

旧安田楠雄邸では、襖・障子にとどまらず、

貼付壁・床の間の天井・腰張りなど、およそ和紙が関係しているすべての箇所を修復した。

「たまたま修復が必要となった時期に自分が居合わせたので、伝統技法がわかって本当にありがたいお仕事でした」

現代建築に和紙ならではの空間を創出

一方で、昨年寛が携わった現場は、これまでにないチャレンジングな事例となった。

都心の超高層ビル内ホワイエの高透過ガラス壁面に和紙を貼り、内側にLED照明を灯す独創的な空間演出。ガラスの面積は合計約一〇〇平方メートルで、そこに三種類・二六〇枚の和紙を、寛をはじめとする五人の職人の手で貼った。

現場工務長の清水建設・尾崎英夫は、「和紙を貼る面積としては、おそらく日本最大級。非常に高い場所で特殊な和紙を貼ることとなり、大変難易度の高い作業が予測された。本当にその道のスペシャリストにお願いたいと考え、協力会社の池袋松屋さんに相談しました」と、両社の信頼関係の高さを語った。

今回この現場の為に特別製作された手漉和紙は、茨城県で漉かれた無形文化財「西の内紙」。池袋松屋企画部がプロデュースした。

「和紙の原料となる木は、楮・三桧・雁皮が有名ですが、西の内紙は地元栽培の楮を原料に、特殊技法で漉きあげられたものです。他にはない表情ですね。優しい紙肌で温かみを持ちながらも強靱です。一見して他の和紙との違いは判別しにくいですが、糊をつければその良さがわかります。表具に耐える力を持っているんです」

「今回特別に漉かれた和紙は、それぞれ個性があって、糊つけ後の伸縮具合はまちまちで取扱いが難しい。ですので『基本に忠実に』を念頭に、当社ラボ内で現場での最終施工を話し合い、若手の者たちと何度も試作を繰り返ししました。和紙の下ごしらえに数カ月費やし、準備を進めたんです」

特に和紙の裁断寸法が重要だった。和紙の特徴を見極め、伸縮後の施工を想定。ラボで事前に和紙を裁断したうえで現場に持ち込み、ガラス面に貼ることに決めたという。

「和紙っていうのは、植物が素材で生き物だから、同じ人間が漉いた同じ紙でも個性差があつて当たり前。それを落ち着かせて、工業製品には出せない工芸的表現を出すのが表具工の仕事だと思っています」



左／「重ね10mm、誤差1mm以内」という厳しい仕様に基づき、糊や温度・湿度の影響を受けやすい3種類の和紙をその変化も計算して貼りあげた。
右／高所での作業、一枚は約60cm×90cmの大きさがあるため、二人で呼吸を合わせて貼っていく。



かけいまさのぶ ●1961(昭和36)年、東京都生まれ。祖父の代からの表具工で、自らも中学卒業後に家業に入った。文化財や公的機関の内装を手がける。現在、株式会社池袋松屋ラボ・上席技術員を務める。壁装及び表具一級技能士。